

D-6 保育的遊戯療法の実践的研究 (3) 手の行動の発達 (自閉傾向の強い / 幼児の事例報告

お茶大家政 ○岸千代子 浅見千鶴子 鈴木宏子 伊賀順子

目的 保育的遊戯療法の活動に参加した、自閉傾向の強い / 幼児の事例について、治療経過を明らかにし、手の行動を中心とした発達の姿を捉えようとした。

方法 対象は Y、M、(3才 男児) の 22 回の臨床経過を追う。手は、精神機能の発達に裏付けられながら、操作の担い手として働き、又、指差し行動、要求行動、情動、感情の表現として働く等、コミュニケーションの担い手として重要な働きをする。以上のような観点から、手の行動を注目することによって、本児の事例につき、幼児の発達像をより明確に捉えようとした。

結果 治療経過の中で、本児は、ものを受けとったり、渡したりする称は対応関係、指差し行動、模倣行動、そして言語の発達がみられた。その際、本児は、母親や治療者として語り語りつづ、人やものへの注視、能動的に視線を動かすこと、相手をみて要求するといった、人に対するまなぶしやびてきている。又、本児の特異な手の行動として「ものをかかげて見る」という固執傾向がみられた。これは、乳児期後半に、坐位から這行等の移動行動がはじまり、母との語りつづきを基礎にした距離のあるかがわりの、視線や手を通じて行われ、能動的な探索活動がすすんでゆく時期の、つまりによる退行的なひきこもり状態と捉えられた。治療経過をとうして、手の行動の発達は、人との関係の発展、視線の発達、模倣行動の発展、言語の発達と相互に密接に関連し合っていることが捉えられた。